



胃がん・大腸がん手術における腹腔鏡下手術の割合

<項目解説>

腹腔鏡下手術とは、カメラで体内の様子を見ながら行う手術のことを言います。この術式は開腹術と比べて非常に小さな創で済み、痛みが少なく、患者さまの早期回復が期待できます。手術部位を拡大して見ることができるので、より精密な治療が可能となります。その一方で、モニターに映し出される限られた視野の中で手術を行うため、技術難易度が高く、習得が困難な術式と言えます。

<当院の実績>

	胃がん	大腸がん
【平成25年度】	94.4% (84/89)	81.3% (100/123)
【平成26年度】	92.9% (65/70)	83.9% (94/112)
【平成27年度】	87.9% (58/66)	80.0% (92/115)
【平成28年度】	90.9% (50/55)	81.3% (96/118)
【平成29年度】	100% (38/38)	79.3% (88/111)

<当院の自己点検評価>

胃がん・大腸がん手術件数はともに微増傾向にあり、腹腔鏡下手術の割合も増しています。高度に進行した癌やリンパ節転移がある場合は腹腔鏡下手術の適応とならず、開腹手術を選択する場合があります。

当院は十勝管内唯一の日本内視鏡外科学会技術認定医を中心とし、技術向上による安全な医療を提供できるよう心掛けています。

<定義>

- ・胃がん・大腸がんに対して施行された手術の算定件数
- ・悪性リンパ腫、GIST（消化管間質腫瘍）、カルチノイド、転移性腫瘍を除く
- ・胃：腹腔鏡下手術 K655-2、K655-5、K657-2
開腹手術 K655、K655-4、K657
- ・大腸：腹腔鏡下手術 K719-3、K740-2
開腹手術 K719、K740

<算式>

分子：腹腔鏡下手術件数

分母：腹腔鏡下手術件数 + 開腹手術件数

基礎データと解析：厚生労働省提出データ（EFファイル）